

翻 訳

楊 国慶「南京台城の今昔」
Yang guo-qing, “Tai-cheng of Nanking, Past and Present”

新 宮 学
ARAMIYA, Manabu

キーワード：南京、台城、城壁、平山郁夫

Key words : Nanking, Tai-cheng, City walls, HIRAYAMA Ikuo

南京の城壁には賞翫に値する多くの場所があるが、私が最も好きな場所は台城部分の城壁である(図1)。鷄鳴寺の古刹からとどく幽玄な仏香と玄武湖をわたる清風の中を、古びた城磚を踏んでいくと、この都市の古今往來を目のあたりにし、あたかもいまなお書きつけられている一巻の歴史長編を読んでいるかのような。

14世紀半ばの南京の城壁建設は、明の太祖朱元璋が南京に都を定めたのち、京師を防衛するため行なった重要な防御プロジェクトで

あった。その城壁は中国築城史上における成熟期の傑作でもある⁽¹⁾。そしてこの部分の城壁は、朱元璋が当時南京の城壁を改築したのちも、一部分廢城として残された。ただ240メートルあまりの長さにはすぎないが、かえって「台城」⁽²⁾の名を冠されたために、大いに名声を博した。近代の南京における代表的な景觀の一つとなった。

台城は、南朝皇帝たちが丹精こめて造り上げた憂傷の記号であった。江南に偏在した政權、華美をきそった建築、奢侈をきわめた生



図1 南京市明城垣史博物館と「台城」段(楊国慶主編『南京城牆磚文』南京師範大学出版社 2008年)

活、走馬燈のように目まぐるしい政権の交替は、ほとんど「台城」文化の主体を構成している。「金陵四十八景」^③という言い方の最も早い起源は明代まで溯る。清代宣統2年(1910)に刊行され、南京人の徐上添が描いた金陵四十八景のうち、「北湖煙柳」というのはこのあたりである(図2)。台城のたもとの垂柳や玄武湖畔の煙気雲霧の中を歩くと、思わず唐代の詩人韋莊^④の一詩の境地を連想してしまう。

江雨霏霏として、江草齊う。
六朝は夢の如し、鳥空しく啼く。
無情なるは最も是れ台城の柳。
旧に依りて煙り籠る十里の堤。

都市の歴史がもつ変化や起伏に思いを馳せると、ため息をつかずにはいられない。

民国期には、社会的名士や文人騷客たちの多くはその名を慕ってこの台城を訪ねている。彼らは、鶏鳴寺のうしろの山の小路に沿って

台城に登り、詩を吟じ絵を描いたり、感慨や游记を表したりした。彼らの情感の深部には、この都市の歴史に対する賛美もあれば、国家の命運や民族の興亡に対する憂慮もあった。

景色はもとのままでも人の世は移り変わる。20世紀80年代、かつて長江の南北に知れわたっていた台城は、すでに堅固な城壁も崩れかけ人跡稀となり、ただ盛んに生い茂る灌木と風になびく茅草があるのみとなった。ある日のこと、台城の崩れた所から、見たところ普通の人と変わらない一群の人たちが出てきた。その中の一人は、国家文物局の著名な古建築の著名な大家羅哲文先生であった。彼らの大半は古建築の保護を己の任務とするその道の専門家たちで、荒涼とした城垣に登りきった後で、目を挙げて四方を望むと、眼前の景観に深く心を動かされた。遠くに見える鍾山は煙霞に黛を引いたようだ。六朝名勝の一つの古鶏鳴寺には仏香がまつわりめぐる。



図2 北湖煙柳 (徐壽卿編『金陵四十八景』広陵書社2006年)

広々とした玄武湖の波光は清らかに光を放つ。南京の市街地にそびえ立つ高層建築はびっしりと並ぶ。彼は心中の驚喜を抑えきれずに周囲の人にこう語った。「500万人以上人口を擁する大都市の中心部で、これほど山や川、城壁や緑林の相連なった秀麗な風光が眺められるのは滅多にないね」と。

専門家たちが台城の上でその城壁に対してひとしきり評価したのは、南京城壁の大規模な修繕の序幕を開いたことである。台城から太平門まで、解放門から玄武門にまで……、一段また一段と荒廃した城壁が修繕された。一片また一片と城壁周辺の環境が整備された。かつてのバラック居住区で零落荒廃していた台城・月牙湖・石頭城・小桃園・東水関・琵琶湖・神策門が、まるで一夜のうちに生成する春の筍のごとく、城壁周辺の文化的景観や市民公園となった。この六百年の南京城壁の維持修理の歴史上で、規模はもちろん資金投入の点でも空前のものである。中国の諺にある「乱世に修城し、盛世に修志す」（乱世には城壁を修築し、盛世には歴史書を編纂する）は、もはや過去の話となった。現在の城壁修築は、防御の必要からではない。文化遺産を保護するためである。これはただ今日の人々だけがよく為しうることだ。30年の短期間に、各界の人々による共同の努力のもと、南京の明城壁文化が定位され、文化遺産としての特質は、すでに確立して確固たるものとなった。そして世紀を跨ぐ南京城壁のこの大規模な維持修理プロジェクトは、まさに台城の修復から開始されたのである。

台城のたもとに、目立たない小さな公園がある。その正式な名称は、「中日合作修復古城牆紀念園」である。南京城の城壁の大規模な

修復プロジェクトが動き出して間もなく、当時、日中友好協会会長、東京芸術大学学長の要職にあった平山郁夫先生がそのことに聞き及んで、南京城の城壁修復に協力する活動を日本国内で巻き起こした。この著名な画家の心意気に対して、国家文物局の局長は「あの侵略戦争に対していかなる責任を負おうとしない者がやって来ても、戦争の傷跡をさっと撫でるだけだ。過去を忘れず未来に対する高邁な展望をもつ文化人の巨匠こそが、協力して平和を築くことができる。これはまさにこの時期に生じた最も感動的な出来事だ。人類の英知と友愛によって生まれる偉大な感情を我々に与えてくれるものだ」と、とても高く評価した。

平山先生らの呼びかけのもと、日本から多くの友人たちが台城にやって来て城壁を修復するボランティア活動に参加した。石川県の視覚障害者協会の一行19人が県会議員に率いられて南京を訪れた時期は、ちょうど南京では、「古城南京を愛護し、明代城壁を修復する」のスローガンのもとに活動が展開されていた。この特別な友人たちは、車に乗って台城に着いた。彼らは高く聳え立つ壮観の南京城壁を目にすることはできないので、手で城壁の基底部から頂部までずっと撫でていた。多くの人々が最後に城磚の銘文に眼を注いでいたとき、「すばらしい歴史、すばらしい建築……」と、一人の女性が小声でつぶやくのが聞こえた。

昔日の台城の姿はもはや歴史の一コマとなろうとしているが、今日の台城は、時代の証人として隆盛している。私の住む南京がこのような名勝の地を擁することを、ますます誇りに感じている。



- | | | | | | |
|--------|---------|---------|-------------------|--------|--------|
| 1 太廟 | 2 社稷 | 3 翰林院 | 4 太醫院 | 5 鴻臚寺 | 6 会同館 |
| 7 烏蛮駅 | 8 通政司 | 9 欽天監 | 10 山川壇 | 11 先農壇 | 12 淨覺寺 |
| 13 吳王府 | 14 応天府学 | 15 大報恩寺 | 16 大理寺・五軍断事官署・審刑司 | | |
| 17 刑部 | 18 都察院 | 19 黄冊庫 | 20 市樓 | | |

図3 明南京城復原図

(潘谷西主編『中国古代建築史』第四卷 元・明卷 中国建築工業出版社 2001年)

訳注

- (1) 南京の城壁 明初に建設された南京の城壁は、周囲「五十九里」とされ、全長の実測は約33.6kmである。城牆は、条石と磚を積み重ねて築造されている。その高さは、14～21メートルにも達する。明代では、正陽門、通濟門、聚宝門、三山門、石城門、太平門、神策門、金川門、鍾阜門、朝陽門、清涼門、定淮門、儀鳳門の13門を設けていた。また頂上部分には、^{ひめがき} 堞口13,616か所と窩鋪（番小屋）200座が設置されていた。
- (2) 台城とは、六朝建康の宮城建康宮のことである。六朝では「台」は朝廷を意味した。東晋の成帝が咸和5年（330）に呉の苑城跡に建設した（『建康実録』巻七、咸和七年原注引『函経』）。周囲八里とされている。中村圭爾『六朝江南地域史研究』（汲古書院、2006）参照。現在、台城と俗称されているところは、南は鷄鳴寺に隣接している。本文にもあるように、後世、誤って六朝の宮城遺址と伝えられた。この台城の北側、解放門上に南京市明城垣史博物館が設置され、1998年5月に開館した。
- (3) 金陵四十八景 清、徐壽卿編『金陵四十八景』（民国9年上海書局石印本を影印、中国園林名勝志叢刊、広陵書社、2006年）の目録には、14番目に「北湖煙柳」を挙げている。本文中の「徐上添」とは徐壽卿のことであろう。
- (4) 韋莊（836～910） 唐・五代の詩人。京兆杜陵（陝西省長安県）の人。黄巢の乱後、荒廃した長安を見て作った「秦婦吟」は人口に膾炙した。六十歳近くになって進士に及第したのち、王建の前蜀に仕えて宰相をつとめた。本文に掲げるのは、「台城」と題する詩で、聶安福箋注『韋莊集箋注』巻四（上海古籍出版社、2002年）に収められている。

附記

楊国慶氏は、南京市明城垣史博物館の研究員である。著書に『南京明代城牆』（南京出版社 2002年）、『南京城牆志』（王志高氏と共著、鳳凰出版社 2008年）などがあり、現在、南京城研究の第一人者として活躍している。これまで2005年8月と2009年9月に行った私たちの南京城壁調査の際に協力していただいた。楊氏によって書かれたこの小篇（原題「風雨鍾山話台城」）は、『江蘇工人報』2009年10月13日付（第4版）に掲載されたものである。

文中で触れられている平山郁夫先生が79歳で亡くなられたのは、それから一月余りの12月2日のことであった。シルクロード遺跡をはじめアジアの文化遺産の保存と修復に大きな貢献を残された平山先生のその足跡については、新聞その他に掲載された追悼記事などであらためて紹介された。しかし南京城壁修復の協力活動への貢献は日本ではあまり知られていないので、ここに訳出して紹介する次第である。深い追悼の意を込めて本誌上での訳出を快諾された楊国慶氏にあらためて謝意を申し上げます。